

X+be+NP+VP 構文、X+be+NP+pp 構文、 X+be+NP+been 構文について

家口 美智子

[要約]

本論は現代英語で vernacular でのみ使用され、存在文において周辺的な構造を持つ X+be+NP+VP 構文 (XV 文)、X+be+NP+pp 構文 (XP 文)、X+be+NP+been 構文 (Xbeen 文) が there と here を使った時 (それぞれ there 文、here 文)、頻度や意味、語用論の機能上どんな差異があるかについての分析を行った。コーパス上では存在文の there+be は直示の存在を表す here+be と比べて比較にならないほど頻繁に使用されているが、この3つの構文においては、there 文と here 文の頻度差は比較的小さいだけでなく、3つの構文の頻度は、there 文、here 文とも XV 文が一番高く、Xbeen 文が一番低いという同様な傾向が見られた。意味論的・語用論的機能に関して、there 文は there was 以外の XV 文は presentative な機能は主ではない。Xbeen 文はそれより若干 presentative に機能する率が高い。一方、there 文の XP 構文と here 文の全部の構文で、presentative な機能が主である。また、XP 文及び XV 文の there 文の there was は come と go が主に使われる構文である。意味上の主語である指示物が来たり行ったりという意味を表し、機能は presentative である。XV 文の there was は there 文の XP 文に意味機能が良く似ていて、他の there 文の XV 文とは意味論的・語用論的機能が異なる文型であると言える。

1. はじめに

英語の存在文には以下のような周辺の構造の文が3つある。Quirk *et al.* (1985: 1407, 1409) によると現代英語では informal な vernacular でのみ使用される。

- (1) There's a man lives in China. (Quirk *et al.* 1985: 1407)
 (2) There's a parcel come. (Quirk *et al.* 1985: 1409)
 (3) a. There's a visitor been waiting to see you.
 b. *There has a visitor been waiting.
 c. There's a new grammar been written.
 d. *There has a new grammar been written.

(Quirk *et al.* 1985: 1409)

(1)は Oxford English Dictionary (以下 OED) (s.v. *there* adv., B. 4 e.) によると、*a man* と *lives* の間に関係代名詞が省略された文構造を持ち、一般的には[there+be+NP]+[Ø+VP] という構造を持つ (例: Lambrecht (1988: 334))と説明されている。¹ 本論では there+be+NP+VP 構文を TV 文 (there と VP の頭文字をとっている) と呼ぶ。Rissanen (1999: 298-299) によると、TV 文は初期近代英語で隆盛を誇り正式な文書でも使われていたが、19 世紀にはカジュアルな場面でしか使われなくなった。Yaguchi (2010a, 2015) と Yaguchi (in preparation) では、*there's* が particle として機能している [there's]+[NP+VP] という構文が 19 世紀あたりから頻繁に出現していると主張している。² 元来、Breivik & Martínez-Insua (2008) では *there's* は文法化し、通常の存在文において inseparable phrase として機能しているため、意味上の主語と数の一致をしないと議論している。また、Svartvik & Leech (2006: 196) は、*There's two women in the waiting room* のような例に見られる数の不一致は標準英語のインフォーマルなスピーチでは非文法であるともはや言えないと主張している。本論は通常の存在文に現れる inseparable phrase としての *there's* より更に文法化が進んだ particle として機能する *there's* を考察していく。

(2)は Quirk *et al.* (1985: 1409) は、完了の意味を持つ文構造であると説明している。Yaguchi (2015) と Yaguchi (in preparation) はこの there+be+NP+pp 構文を be と pp が結びついた現在完了の文型であることを立証している。本論では TP 文 (there と pp の頭文字をとっている) と呼ぶ。Rydén & Broström (1987) によると、完了形を作る際、自動詞に関しては、be+pp が 1820 年頃まで have+pp より頻繁に使用されており、Yaguchi (2015)、家口 (2016)、Yaguchi (in preparation) は古い形の完了形が存在文で使

用されている例であると説明している。

(3)の there+be+NP+been 構文に関して、本論では Tbeen 文と呼ぶ。以下のような先行研究がある。

- (4) a. There are three visitors (?been) waiting to see you.
 b. There was a new grammar (*been) published recently.
 (Quirk *et al.* 1985: 1409)
- (5) a. *There is a man been shot. (Lakoff 1987: 562-563)
 b. *There has a man been shot. (ibid.)
 c. *There's a man been shot, isn't there? (ibid.)
 d. There's a man been shot, hasn't there? (ibid.)
 e. *There've many people been killed this week. (ibid.)
- (6) a. There's a man been shot, there has. (ibid.)
 b. *There's a man been shot, there is. (ibid.)

(3)から there's は there+has の縮約形ではないこと、(4)、(5a)より縮約形でない be 動詞も用いられないことがわかる。家口 (2016) で Tbeen 文は there's しか用いられない点から、there's が particle として機能し、NP と been の間に have が抜けた形の TV 文のカジュアル版、つまり [there's]+[NP+(have)+been] という構造を取る文であることを議論している。彼女の議論を精査することを本論の目的の一つとする。

一方、英語には there だけでなく、here を使った同様の構造の文が英語には存在する。

- (7) “Listen, Pere, here's a fellow wants to talk to you.”
 [1955, Mac Hyman *No Time For Sergeants*, COHA]
- (8) Here is a man fallen in a fit ...
 [1891, Oliver Wendell Holmes *Medical Essays*, COHA]
- (9) Here's Eugie been walking home with the Burr boy!
 [1900, Ellen Anderson Gholson *The Voice of the People*, COHA]

本論では、TV 文と同様な構文 (here+be+NP+VP) である(7)を HV 文 (here と VP の頭文字をとっている) と呼ぶ。Ukaji (2003) は(7)は[here+be+NP]+[Θ+VP]という構造を持つ文であると説明している。(8)は TP 文と同様な構文 (here+be+NP+pp) であり、

HP 文 (here と pp の頭文字をとる)と呼ぶ。(9)は Tbeen 文と同様な構文 (here+be+NP+been) をとり、Hbeen 文と呼ぶ。以上の there と here を使った 3 つの X+be+NP+VP 構文、X+be+NP+pp 構文、X+be+NP+been 構文をそれぞれ XV 文、XP 文、Xbeen 文と呼ぶ。本論は there を基とした文 (there 文) と here を基とした文 (here 文) が意味機能でどんな差異があるのかを明らかにする。

また、本論での「presentative」な機能とは、通常言われている存在文の基本的な機能つまり「新しい指示物をディスコースに紹介する」というものでなく、「新しい指示物の存在に焦点をあてる」機能として使用する。例えば、(10)で Biber *et al.* (1999: 951) は文脈に初めて出てきた a man ではなく、この物語の主人公である a bear に存在文が使われ焦点をあてていることを指摘し、存在文とはただ新しい指示物をディスコースで紹介する機能だけでなく、presentative な機能も持っているものもあることを指摘している。

- (10) A man goes in the pub. There's a bear sitting in the corner. He goes up, he goes up to the bartender. He says, why is there a bear sitting over there? (Biber *et al.* 1999: 951)

また、本論では Corpus of Historical American English (以下 COHA、1810 年から 2009 年までの 4 億語を収録)を主に分析する。³

2. 先行研究

Yaguchi (2015) は there を基とした COCA における 3 つの構文を詳細に分析している。まずは以下の分析結果を見られたい。

表 1: COHA の TV, TP, Tbeen 文の頻度 (生起数) (Yaguchi (2015))

			1810s-1840s	1850s-1880s	1890s-1920s	1930s-1960s	1970s-2000s
Ratio of <i>there's</i> to total occurrences	TV	47.9%	57.7%	84.7%	71.1%	82.1%	
		(35/73)	(56/97)	(94/111)	(69/97)	(23/28)	
	TP	33.3%	62.0%	62.9%	23.1%	50%	
		(3/9)	(13/21)	(22/35)	(3/13)	(5/10)	
	Tbeen	100%	100%	81.8%	100%	87.5%	
		(2/2)	(9/9)	(9/11)	(6/6)	(7/8)	

Number disagreement rate of <i>there's</i>	TV	2.9% (1/35)	5.4% (3/56)	20.2% (19/94)	29.0% (20/69)	34.8% (8/23)
	TP	0% (0/3)	0% (0/13)	4.5% (1/22)	0% (0/3)	20% (1/5)
	<i>Tbeen</i>	50.0% (1/2)	11.1% (1/9)	33.3% (3/9)	16.7% (1/6)	28.6% (2/7)

表 1 より Yaguchi (2015) は次の事実をあげている。

- ①TV 文は *there's* の使用率と数の不一致率が 1890 年から急に上がっている。
- ②TP 文は *there's* の使用率と数の不一致が 3 つの中で一番低い。
- ③Tbeen 文は *there's* の使用率と数の不一致率が一貫して高い。

TV 文は *There's folks think that isn't a pretty picture* (1954, COHA fiction) のように *there's* と意味上の主語が数の不一致を起こすことが多い。はじめに述べたとおり、Yaguchi (2015) は TV 文に関して、*there's* は①の理由から 1890 年あたりより、従来の [there+be+NP]+[O+VP] とは異なる [there's]+[NP+VP] という *there's* が particle のように機能している構文が頻繁に使用されるようになったと議論している。最たる例として *There's something's happened...* (1949, COHA fiction) を Yaguchi (in preparation) はあげている。つまり NP と VP の間に関係代名詞が省略されているなら *something's* というような clitic である *'s* が *something* に付くような現象は起こらない。Yaguchi (2015) は COHA における一般の存在文に出てくる *there's* の不一致率の平均は 10.2% であることから、TP 文とカジュアル度はあまり変わらない (Yaguchi (2015) で証明済み) にもかかわらず一挙に数の不一致率が上昇していることを考えると [there's]+[NP+VP] という構文を想定しないと説明できないとしている。つまり、COHA という書き言葉のコーパスにおいて *be* 動詞と意味上の主語の数の不一致が、一般の存在文と大きくかけ離れているということは、ただ単にインフォーマル度が上がったというだけでは説明ができない。*there's* と NP の間に文法的なつながりがないということが考えられる。表 1 より 1890 年代より急速に不一致率が上がっているので、この頃より *there's* が独立した文型が頻繁に出現してきたと考えられる。

TP 文に関しては、Yaguchi (2015) と Yaguchi (in preparation) は②の事実が観察されることにより、*be+pp* で *be* がプロファイルされていると主張している。つまり、*there's*

以外の動詞形も意味上の主語の数に対応して正確に選択され、数の不一致があまりないということは、カジュアルな文型ではあるが、be 動詞が pp としっかり結びついた文である。

Tbeen 文に関しては、家口 (2016) が元来あった[there+be+NP]+[Θ+have+pp]という文型が歴史的な経緯から TV 構文自体がカジュアル化する中で、have が省略され、there's 以外の動詞形は使われなくなり、TV 文のカジュアルな形であると考察し、there's が particle として機能する[there's]+[NP+(have)+been]という文型であると議論している。つまり、上で見た 1900 年頃から頻繁に現れ出した[there's]+[NP+VP]の構文の最たる例が Tbeen 文であるという主張だ。1 章でも述べたが、この点を再点検する。Yaguchi (2015) は数の不一致率が TV 文より低い要因は、Biber *et al.* (1999: 291) が明らかにしたテキストがフォーマルになればなるほど単数の名詞の割合が減るという事実を基に、⁴ Tbeen 文自体がカジュアルな文型なので NP に現れる意味上の主語が単数である可能性が高いため数の不一致率も必然的に低くなるのではないかと推測している。次章では、これら there 文の 3 つの構文を here 文と比べる。

3. 考察

まず、there 文と here 文の生起数を比較する。COHA に出現した全ての生起数を表 2 にまとめている。COHA の 1810 年から 2009 年までの 200 年を 5 期に分けた最後の 2 期 (1930 年から 2009 年までの 80 年) の生起数をカッコに入れてある。

表 2: COHA における there 文と here 文の生起数
(カッコ内は 1930 年以降の生起数)

	XV 文 X + be + NP + VP	XP 文 X + be + NP + pp	Xbeen 文 X + be + NP + been
there 文	406 (125)	88 (22)	36 (14)
here 文	81 (23)	61 (12)	9 (1)

there 文と here 文の生起数を比較すると、there 文が多いことがわかる。実際、現代英語のコーパスでは there の方が here よりも多く使用されている。例えば書き言葉のコーパスである Frown では here は 740 回、there は 2,222 回使用されている。また、be 動詞と結合した形を検索すると、BNC の話し言葉のサブコーパスで、here's, here is, here are, here was, here were はそれぞれ計算上 541 回、72 回、56 回、51 回、3 回使用され

ているが、⁵ *there* に関しては *there's* だけで 16,976 回使用されている。この事実を考えると、これら 3 つの構文に関しては *here* 文はかなり頻繁に使用されていることがわかる。特に XP 文において大差がない。また、1930 年以降は全部の構文で頻度が落ちているが、*Hbeen* 文は特に激減している。

次に、表 3 と表 4 で動詞形ごとの頻度をあげる。

表 3: COHA における TV 文、TP 文、Tbeen 文の生起数

(カッコ内は 1930 年以降の生起数)

	<i>there's</i>	<i>there is</i>	<i>there are</i>	<i>there was</i>	<i>there were</i>
TV 文	277 (92)	57 (5)	9 (4)	53 (20)	10 (4)
TP 文	46 (8)	17 (3)	4 (3)	16 (8)	5 (1)
Tbeen 文	33 (13)	1 (0)	0	2 (1)	0

表 4: COHA における HV 文、HP 文、Hbeen 文の生起数

(カッコ内は 1930 年以降の生起数)

	<i>here's</i>	<i>here is</i>	<i>here are</i>	<i>here was</i>	<i>here were</i>
HV 文	60 (19)	17 (1)	0	4 (3)	0
HP 文	35 (13)	11 (0)	3 (1)	11 (3)	1 (0)
Hbeen 文	9 (1)	0	0	0	0

there 文と *here* 文の構文ごとの傾向は同様である。第 1 に、XV 文が一番多用されている。第 2 に、TP 文と HP 文は縮約形以外の動詞が 3 つの構文の中では一番よく使われている。また、Xbeen 文は頻度が一番低く縮約形がほとんどである。全般的に、*there* 文も *here* 文も縮約形が多数使用されている。XV 文、XP 文、Xbeen 文の 3 つの構文ともカジュアルな表現であることが良くわかる。構文によって分布が類似の傾向を見せるところが非常に面白い。次の表 5 を見られたい。COCA 全期にわたってどれだけ縮約形が使われているかを示している。

表 5: COCA 全期における *there* 文と *here* 文の縮約形の割合

TV	68.2%	HV	74.1%
TP	43.0%	HP	57.4%
Tbeen	91.7%	Hbeen	100%

表 6 は 1930 年以降の割合である。

表 6: COCA の 1930 年以降の *there* 文と *here* 文の縮約形の割合

TV	73.6%	HV	82.6%
TP	34.8%	HP	75.0%
Tbeen	92.9%	Hbeen	100%

表 5 と表 6 を比べると、*here* 文のほうがより縮約形を多用していることから、カジュアルな状況をより頻繁に表現することがわかる。特に 1930 年以降は、*there* 文以上にカジュアル化が進んだようである。

there 文、*here* 文とも縮約形以外は頻度が低いので、本論では縮約形を中心にしつつ、*is was* の動詞形も考察する。但し、Tbeen 文の *there is* (1 例)、*there was* (2 例)、HV 文の *here was* (4 例)、Hbeen 文の *here is* (0 例)、*here was* (0 例) はデータ数が少ないので、分析から外す。

まず、縮約形と意味上の主語との数の不一致を考察する。表 7 を見られたい。*here* 文が 1930 年以降頻度が低いので COCA 全体の縮約形のみを比べる。

表 7: COHA における *there's* 文と *here's* 文の数の不一致率

	XV 文 <i>X + be + NP + VP</i>	XP 文 <i>X + be + NP + pp</i>	Xbeen 文 <i>X + be + NP + been</i>
<i>there</i> 文	18.4%	4.3%	24.2%
<i>here</i> 文	0%	1.5%	11.1%

まず XV 文から考察する。表 1 が示しているように、*there's* を使用した TV 文は 1890 年以降数の不一致率が急速に上がったが、表 7 によると、COCA 全体の平均値をとって 18.4% と高い。一方、HV 文は 0% である。HV 文が数の不一致を起こさないということは *be* と NP が緊密に関わっていることを示しており、表 7 を見る限り、XV 文のデフォルトの構文は Ukaji (2003) の説明どおり、 $[X+be+NP]+[\Theta+VP]$ であり、HV 文も $[here+be+NP]+[\Theta+VP]$ という構文を仮定するべきであろう。しかしここで注意すべき点は、表 4 において、複数形の *here are*、*here were* の用例がないことである。つまり、HV 文に現れる NP の数はほぼ単数であるため、⁶ 数の不一致が起きていないと

ということになる。前述の通り、テキストがフォーマルになればなるほど単数の名詞の割合が減るという事実 (cf. Biber *et al.* (1999: 291)) より、HV 文はカジュアルな文脈で使用されると推察できる。一方、there's が particle として機能するようになったが、here's は同じ構文を取る環境にあっても here と be 動詞が particle というレベルまで融合したかどうかは証明できない。しかしながら、一般的な here's の不一致率は一般的な存在文の there's と比べて極めて低く、Yaguchi (in preparation) によると BNC の話し言葉のサブコーパスでも 7.4%で、ライティングだと 1.0%である。2 節でも見たとおり、COHA という書き言葉のデータで、there's の場合不一致率は 10.2%程度である。here's が particle 化するだけの特殊性があるとは考えにくい。よって、Ukaji (2003) が主張するように[here+be+NP]+[Θ+VP]という構造であると結論づけて良いであろう。

XP 文に関しては、TP 文で議論した、be と pp が結びついた完了を表現する構文であるが、HP 文に関しても同様であるようだ。不一致率が低い。表 4 より、HP 文も様々な形の動詞を選択しているようで、TP 文と似ている。there にせよ、here にせよ、同じ傾向を見せている点はとても面白い。

Xbeen 文のデータは面白いことを提示している。上で述べたように、Tbeen 文を家口 (2016) は[there's]+[NP+(have)+been]の構造を持つ TV 文であると議論している。Hbeen 文はどうであろうか。数の不一致率 11.1%と高い数値が出ているものの全例が 9 例しかないので確証を持って断言できないが、here is や here was が一度も使われていないところを見ると、HV 文よりカジュアルな文型であると考えられる。が、どんな構造を持つと考えるのが良いであろうか。here 文は here's が particle として機能しないと上で確認したので、⁷ Hbeen 文は[here's]+[NP+(have)+VP]の構造を持つ可能性はないだろう。よって Ukaji (2003) が主張するように、XV 文のデフォルトな構造である[here's+NP]+[Θ+(have)+been]の構造を持つカジュアルな文型であると考えるのが妥当であろう。しかしながら、COHA で 1944 年以降、Hbeen 文が使われていないため、データ不足でこれ以上の確認作業ができない。⁸

一方、家口 (2016) で議論した Tbeen 文が[there's]+[NP+(have)+been]の構造を持つという議論は修正が必要で「Tbeen 文は there's が particle として機能している[there's]+[NP+(have)+been]の構造を持つ場合とデフォルトの[there+be+NP]+[Θ+(have)+been]という構造を持つものがある」という議論にしなければならない。実際、Tbeen 文で there's 以外が使用されている 3 例を見ると、2 例は 1900 年代初期であるが、最後の例は 2000 年である。⁹

- (11) ...there was a big guy been here exactly three months, drinks water every day at four o'clock in here ...

[2000, Lee Child *Tripwire*, COHA]

この例は 2000 年でもデフォルトの構文がまだ存在している証拠であり、やはり両者の構造を持つと考えたほうが良い。よって家口 (2016) の主張は修正されるべきである。¹⁰

ここで、構文による、あるいは *there* 文と *here* 文の機能の差を考察する。まず、意味上の主語が構文あるいは *there/here* によって *definite/indefinite* という差があるのかどうかを確認する。(12)、(13)を見られたい。(12a)、(13a)はそれぞれ TV 文と HV 文、(12b)、(13b)はそれぞれ TP 文 HP 文、(12c)、(13c)はそれぞれ Tbeen 文と Hbeen 文である。

- (12) a. There's your master has been with my master, ...

[1847, Epes Sargent *Love's Sacrifice*, COHA]

- b. But, mercy! there is Uncle C. come to take me to ride.

[1843, Harriet Beecher Stowe *The Mayflower; or, Sketches of Scenes and Characters among the Descendants of the Pilgrim*, COHA]

- c. If you please, ma'am, there's Jem Morris been waiting in the kitchen all the morning to see you.

[1876, Emma Dorothy Eliza Nevitte Southworth *Ishmael In the Depths*, COHA]

- (13) a. Here's Missis will pay for them.

[1852, Harriet Beecher Stowe *Uncle Tom's Cabin*, COHA]

- b. "Here is this young woman come again."

[1888, Emma Dorothy Eliza Nevitte Southworth *Capitola the Madcap*, COHA]

- c. Here's Mis' Haye been cryin' and the tea-kettle singing an hour ...

[1852, Susan Warner *Hills of the Shatemuc*, COHA]

分析結果の表 8、表 9 を見られたい。

表 8: COCA における definite な意味上の主語の割合 (there 文)

	there's	there is	there was
TV	1.4%	5.3%	3.8%
TP	8.7%	17.6%	6.3%
Tbeen	3.0%	NA	NA

表 9: COCA における definite な意味上の主語の割合 (here 文)

	here's	here is	here was
HV	46.7%	11.8%	NA
HP	37.1%	45.5%	9.1%
Hbeen	77.8%	NA	NA

there 文においては、TP 文が TV 文より相対的に definite な意味上の主語が若干多いということが言える。Yaguchi (2010b) によると、通常の存在文において、話し言葉で一番 definite な意味上の主語の頻度が多い there was でも 10%を超えないことを考えると、there is の TP 文以外では、10%を超していないので、通常の存在文と大差がない。there is は頻度が比較的高いが表 3 にあるように COHA では 17 例しかないので 1 例が大きな重みを持つので注意が必要である。

一方、here そのものが直示的な状況を表す語であることを念頭において here 文を見ていく。HV 文、Hbeen 文の縮約形では頻繁に definite な主語が頻繁に使用されている。HP 文においても here was 以外は definite な主語の比率が高い。このように here 文は主語が definite であるものが頻繁に使用されていることが特徴である。一般の here+be+NP 文も現在形単数の here's、here is で 40%を超しており、¹¹ 同様な傾向が見られる。there 存在文のように新しい指示物をディスコースで紹介するという機能とは異なり、here が使われる場合は、話し手と聞き手が同じ場面にいる前提となり、どうしても話し手と聞き手が了解している指示物に関するものがトピックになることが多いということがわかる。HP 文の here was で indefinite な主語が使用されがちなのは、話し手と聞き手の目の前の状況ではなく過去の状況を表現するため、主語が特定のものになりにくいのであろうと推察される。

次に presentative かどうかを確認する。Aissen (1975) で、存在文が presentative に機能する時は肯定文で現在形あるいは過去形でなければならない（助動詞は用いられない）と指摘している。(14)のような否定の語（no, none, not, never 等が含まれる）が

あると、指示物が存在しないことを述べる文となり、意味機能は *presentative* であるとは言えない。なぜなら、*presentative* というのは指示物の存在に焦点をあてることだからである。(14a)は TV 文、(14b)は HV 文である。

(14) a. There's no one can get things going like your dad!

[1966, Edwin O'Connor *All In the Family*, COHA]

b. Here's none shall affront my grannam!

[1906, Beulah Marie Dix *Road to Yesterday*, COHA]

結果は以下の表 10、表 11 を見られたい。

表 10: COHA における *there* 文の否定の割合

negation	there's	there is	there was
TV	35.0%	63.2%	7.5%
TP	6.5%	0%	0%
Tbeen	15.2%	NA	NA

表 11: COHA における *here* 文の否定の割合

negation	here's	here is	here was
HV	1.7%	0%	NA
HP	0%	0%	0%
Hbeen	0%	NA	NA

もし、これらの構文が *presentative* であれば、否定の要素はあまり出てこないはずである。表 10、表 11 を比べると、*there was* 以外の TV 文は否定の要素が頻繁に使われているため、*presentative* であるのが主な機能であると言えない。実際、Frown においては通常の存在文では 26.2%が否定の要素が使われているが、*there was* 以外は 26.2%よりずっと多い。TP 文は否定の要素があまり使われていないので、*presentative* な文を表すのに使われる構文であると言える。Tbeen 文は *presentative* な機能として使われる率は *there was* の TV 文より低い、*there's* や *there is* の TV 文より高い。完了を表す文なので、TV 文の *variant* として、「NP が・・・していない」というより「NP が・・・した」という *presentative* な機能として使われやすいと推察できる。一方、直

示的な状況表現する here 文は、当然 presentative な状況表現することが多いと予測できる。実際、HV 文、HP 文、Hbeen 文で、否定の要素が使われることは少ない。

次にどれだけ、come/go が使われているかを比較する。XV 文、XP 文では come と go がしばしば使われる。例として there 文の(15)、here 文の(16)を見られたい。

- (15) a. ... there was a man came running up this woman all that time my
father came running ... [1934, Albert Halper *Prelude*, COHA]
b. Though there's one engine gone, we will still carry on, ...
[1998, Jane Roberts Wood *My Mother Had a Maid*, COHA]
- (16) a. ... and here was the Arabian Nights come to life only modern.
[1947, Clyde Brion Davis *Jeremy Bell*, COHA]
b. ... here's a ringlet gone romping ...
[1949, Herman Melville *Pierre or, The Ambiguities*, COHA]

(15a)と(15b)はそれぞれ TV 文、TP 文の例である。(16a)と(16b)は HP 文の例である。Xbeen 文では動詞は出てこないなので、ここでは分析対象から除外する。XV 文、XP 文でどれだけ come と go が使われているかを見る。表 12 を見られたい。

表 12: there 文と here 文における come と go の割合

come/go	there's	there is	there was
	here's	here is	here was
TV	3.6%	3.5%	86.8%
TP	78.3%	82.4%	87.5%
HV	3.3%	5.9%	NA
HP	80.0%	72.7%	81.8%

表 12 より、TP 文、HP 文ともこの二つの動詞が頻繁に使用されていることがノームとなっていることがわかる。また、TV 文の there was が圧倒的に比率が高いが、それ以外の動詞形の TV 文、HV 文は比率が低い。これを考えると、XP 文自体が指示物が来たり行ったりすることを表現するある程度固定化された文型であり、TV 文の

there was だけがこの二つの動詞が主に使われるため、TP 文に意味機能が近い用法であると言える。先に見た否定の要素を示している表 10 で見たように、TV 文の there was だけは否定要素が少なく、presentative な機能を擁しているし、その意味で TP 文と極めて近い機能を持っていると思われる。XP 文は完了を表す文であるが、TV 文でも過去形が使われると完了と近い意味が表現されるのであろう。

4. おわりに

本論では X+be+NP+VP 構文、X+be+NP+pp 構文、X+be+NP+been 構文に関して以下のことを明らかにした。

1. there を基とした文と here を基とした文は頻度は there 文の方が高いが、XV 文、XP 文、Xbeen 文と 3 つの構文での頻度はほぼ類似した傾向—XV 文、XP 文、Xbeen 文の順序で頻度が減少する—を見せている。ただし現代英語では全ての構文で頻度は減少している。
2. 縮約形の出現率では 3 つの構文で here 文のほうが there 文より若干高いが、構文による縮約形の出現率ではほぼ類似—Xbeen 文、XV 文、XP 文の順序で頻度が減少する—の結果を得た。here 文の方が縮約形が使われる率が高いこと、NP は単数の形がほぼ使用されていることから、there 文よりカジュアルな文型であると推測される。
3. 語用論的機能に関して、TV 文は there was 以外では presentative な機能は主ではない。TP 文と TV 文の there was は presentative に機能する。Tbeen 文は若干 presentative に機能する可能性が高い。here 文は HV 文、HP 文、Hbeen 文すべて presentative な機能が主である。
4. XP 文及び TV 文の there was は come と go が主に使われる構文である。指示物が来たり現れたりという意味を表す。3 でも述べたが、TP 文と TV 文の there was は presentative である。TV 文の there was は TP 文に意味機能が良く似ている文型であると言える。
5. Yaguchi (2016) は Tbeen 文は[there's]+[NP+(have)+been]の構造を持つと主張しているが、[there's]+[NP+(have)+been]の構造を持つ場合と[there+be+NP]+[Θ+(have)+been]の構造を持つ場合があることを想定するべきであるという、代替案を提示した。

注

不備な点を詳細にご指摘くださった二人の査読の先生にこの場を借りてお礼申し上げます。当然ながら、この最終版に残る不備はすべて筆者の責任である。

¹ 本論では、省略された関係代名詞は Θ として表記している。

² 本論における *particle* を定義する例として *let's* をあげる。Hopper & Traugott (2003: 10) は、*let's* が文法化を遂げて、*let's* の *us* の統語的機能及び意味が消滅してし、*particle* として機能している例をあげている。

(a) Let's you and I take 'em on for a set. (Hopper & Traugott 2003: 10)

[1929, Faulkner, *Sartoris* III. 186, *OED*]

(b) Let's you go first, then if we have any money left I'll go.

(Hopper & Traugott 2003: 11)

(a) も (b) も *us* の存在が意味的に希薄になり、*let's* は *hortative* な機能だけを表現している。本論での *particle* とはこのように文法的な要素が希薄になり品詞分解ができない状態になったものであると定義する。

³ 検索は 2014 年 3 月に行った。

⁴ ここのテキストというのは、存在文に関するテキストではなく、英語全般にわたるテキストである。

⁵ *here's* は 500 個、*here is* は 200 個、*here are* は 200 個、*here was* は 64 個、*here were* は 21 個をサブコーパスから取り出して例を全て検証し、話し言葉のサブコーパス全体でどのくらいの用例があるかを割合として算出した。

⁶ *here was* に 1 例 NP が複数の例がある。

⁷ 11.1% という不一致率も一般の存在文の不一致率 (10.2%) とほぼ同じであるので、*particle* であると言えない。

⁸ COCA や BNC でも例は見られない。

⁹ 以下が残りの 2 つの例である。

a. Seems if there was some been done right here in Marsden township.

[1905, Evelyn Raymond, *The Brass Bound Box*, COHA]

b. There is one of them been shook entirely off my house by your well.

[1907, Frank Richard Stockton, *The Magic Egg and Other Stories*, COHA]

¹⁰ 査読の先生より、1 例あるからという根拠で、2 つの構造を提示することは危険であるという指摘を受けた。Quirk *et al.* (1985: 1407) や Lakoff (1987: 562-563) の言語学者の直感によると *there's* 以外の動詞形は使用されないということであるが、現代英語でも COHA で 1 例あるこ

とから、[there+be+NP]+ [Θ+(have)+been]という TV 構文と共通する構文を想定しておきたい。

¹¹ here+be+NP 文における definite な主語の割合の表を提示する。

	here's	here is	here are	here was	here were
BNC writing	27.0%	40.1%	14.5%	14.3%	36.2%
BNC spoken	64.3%	40.5%	5.0%	7.8%	0%
COCA writing	52.2%	44.0%	14.3%	14.8%	33.3%

Yaguchi (in preparation)より

参考文献

- 安藤貞雄. (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社.
- Aissen, J. (1975) “Presentational-*there* Insertion.” *Chicago Linguistic Society* 11: 1-14.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Breivik, L. E. & A. E. Martínez-Insua. (2008) “Grammaticalization, Subjectification and Non-concord in English Existential Sentences.” *English Studies* 89 (3): 351-362.
- Hopper, P. J. & E. C. Traugott. (2003) *Grammaticalization*, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, K. (1988) “*There was a farmer had a dog*: Syntactic Amalgams Revisited.” *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 319-339.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: Chicago University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.
- Rissanen, M. (1999) “Syntax.” In R. Lass (ed.), *The Cambridge History of the English Language*, vol. 3, 187-331. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rydén, M. & S. Broström. (1987) *The be/have Variation with Intransitives in English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Svartvik, J. & G. Leech. (2006) *English: One Tongue, Many Voices*. New York: Palgrave Macmillan.
- Tagliamonte, S. A. (1997) “Obsolescence in the English Perfect? Evidence from Samaná English.” *American Speech* 72(1): 33-68.
- Ukaji, M. (2003) “Subject Zero Relatives in Early Modern English.” In M. Ukaji, M. Ike-uchi, & Y. Nishimura (eds.), *Current Issues in English Linguistics*, 248-277. Tokyo: Kaitakusha.
- Yaguchi, M. (2010a) “The Historical Development of the Phrase *there*’s: An Analysis of the *Oxford English Dictionary* Data.” *English Studies* 91(2): 203-224.
- Yaguchi, M. (2010b) “*There* + singular *be* Construction: Synchronic and Diachronic Perspectives.” 『英語コーパス研究』 17: 97-113.
- Yaguchi, M. (2015) “*There* in *there* Contact Clauses Revisited.” 『近代英語研究』 31: 45-70.
- 家口美智子. (2016) 「*There*’s+NP+been 文の一考察」 『撰大人文学』 23: 43-56.
- Yaguchi, M. (in preparation) *Existential Sentences from the Diachronic and Synchronic Perspectives: A Descriptive Approach*. PhD dissertation.

Summary

This study examines three constructions using *there* and *here*: X + *be* + NP + VP (XV); X + *be* + NP + pp (XP); and X + *be* + NP + *been* (X*been*). The following five points were revealed. First, the *there*-based and *here*-based constructions exhibit parallel tendencies in their frequencies: the XV construction shows the highest occurrences, while the X*been* construction shows the lowest occurrences. In addition, although *there* + *be* existential sentences appear far more frequently than *here* + *be* sentences, the differences in occurrences between the *there*-based and *here*-based constructions are not very great. Second, in terms of the use of the shortened form, the *here*-based constructions show higher rates than their *there*-based counterparts. Furthermore, because most of the NPs are made up of singular nouns in the *here*-based constructions, the *here*-based constructions are considered to be more casual than the *there*-based constructions. Third, the *here*-based constructions function presentatively, while the *there*-based constructions are less likely to do so except for the XV construction using *there was*. Fourth, the XP construction and XV construction using *there was* use *come* or *go* very abundantly as their pp or the verb in the VP. Thus, it is possible to conclude that the *there* + *was* + NP + VP is very similar to the *there* + *be* + NP + pp construction in function. Fifth, Yaguchi's (2016) argument that the *there* + *be* + NP + *been* construction comprises the [*there*'s] + [NP + (*have*) + *been*] structure should be modified. Instead, this study maintains that the construction concerned comprises the [*there*'s] + [NP + (*have*) + *been*] structure or the [*there* + *be* + NP] + [Ø + (*have*) + *been*] structure.